

知識情報研究所長
藤原 鎮男

昭和61年5月に発足した学校法人神奈川大学知識情報研究所は、平成元年3月で約3年を経過した。

この間、各位のご後援・ご協力により各種の事業を順調に行い、所期の理念に沿った活動を成し得たことは感謝に絶えぬところであり、学内外の関係者に厚くお礼申しあげたい。

さて、この時点で菅野理事長は次のように述べておられる。

「今、我が国産業社会は、大きな転換を遂げつつある。我々大学人も国際化、情報化、価値の多様化などと表現される新たな社会の建設を期し、経済成長のみを追求した時代を過去のものとし、社会の転換へ正しく対応し、科学技術の革新的な発展をはからねばならない。すなわち、新たな未来を切り開くことは、大学の使命である」とされ、「本学が湘南平塚新校地に理学部・経営学部新設を計画したのも、この自覚に基づくものであり、その第一着手が知識情報研究所の設立であった」と本研究所の位置づけをされ、さらに「新設の理学部は、情報科学、化学、応用生物科学の3学科による現代科学技術の中核分野的教育研究を目指し、その前駆として、現代の科学技術の基盤である基礎と応用、研究と開発、さらには研究と教育の一体化方式による知識情報研究所の活動を進めるのである」と。

また、荻原学長も次のように述べておられる。

「本学は、創立60周年を迎えるので、これを契機に次の世紀の展開を担う[新

しい時代の新しい大学像]確立を企図しており、その具体化の一つとして平塚新キャンパス新学部建設を企画し、その推進体としてまず本研究所を設立した。国際化、情報化が急速に進展する中で、新学部構想を時代の要請に応え、かつ、地域社会の活性化にも貢献するものにするため、ここに他の大学に先駆けて、しかも法人所属として当研究所が開設されたことの意義は大きい」と。

このようなごあいさつを得て、あちたて我々は責任の重さを痛感する。

理事長は、現下の社会情勢の変革期に遭遇した我々としては、この変革への対応を担う人材養成のために画期的な高等教育を実現しなければならないとし、その具体的像は基礎と応用を一体化した教育研究の実現であるとされ、学長は、上記の計画は神奈川大学の伝統と地域社会の支持によりはじめて達成されと考えられ、その根本を持つゆえに平塚キャンパス計画が本学の60周年記念行事の主要な一項にカウントされ、順調に進展したとして開学部在先立ってのこの3年の我々の活動を多とされたのである。

経過一研究所の構成と事業一

発足時において我々は研究所を情報科学、物質科学、および人間・生物科学の3つの柱によって構築することを期し、この面での内外の有力研究者によって7名の顧問(うち海外3)および主任研究員15名(うち海外3)を委嘱し、事業としてフォーラムおよび国際集会の開催、共同研究の実施をはかった。その概況は以下のごとくである。

[フォーラム]

今までに行われたフォーラムのテーマは別表のごとくである。これらは、基礎応用の融合、生涯教育、国際化などのテーマを掲げる今後の大学教育の本質的基盤形成に役立つものと信ずる。

[共同研究]

我々は昭和62年度から「新安全学」を表題とする共同研究を開始した。近年の科学技術は原子力、航空、化学プラントなどの巨大技術を生み、その安全は人類生存の行方に関わり、またその安全は科学技術の域内のみでは達成不可能であり、特にヒトとの関わりが第一義の重要事と認識されるに至っている。また、我々を取り巻く「自然環境」の安全や医薬の「安全」も我々の眼前の根本事として登場してきている。そこで我々は、「安全」の問題を単なる災害対応や情緒の問題としてではなく、計測(数理科学)、センサー開発(物質科学)、医薬(生物科学)の3つの視点で取り上げ、「安全」の保持、危険の予防の科学をいかに体系的に構築するかを当面の検討の課題にしぼり研究会を数次開催しつつある。

[国際集会]

上記に関連し、昭和62年秋「新安全学」国際シンポジウムならびにフォーラムを開催した。これは、化学工場災害対応に深い学識経験を持つスミス氏(ダウ化学)、米国の土木建築の安全問題について代表的位置にあるクレマー博士、さちには国際情報ドクメンテーション連盟産業情報部会幹事のファーカス・コン博士、原子力システムの安全について令名のあるラスムッセン博士(デンマークリソー研究所)などの参加を得て有益な研究討議が行われた。この国際集会は平成元年1月にその第2回が継続開催された。

[第2回知識情報国際集会]

計算機科学の進歩の結果、近年各専門分野の知識情報の体系処理、すなわち、そのデータベース化と高次利用は学術の大事となってきた。そこで、この問題の全体の展望を得る目的で第1回の表記国際集会が昭和59年東京で行われ、今回、その2回目が、日本学術振興会および神奈川大学その他の共催後援により、神奈川県民ホールで3日間にわたって行われた。招待講演者には、文献情報および数値情報の国際機関の会長であるヒル氏(大英図書館次長、FID:国際ドクメンテーション

連盟会長)、ライド博士(米国標準局部長、CODATA:国際数値情報連合会長)、グメリンハンドブックのオンライン化を実現したグメリン所長のフルック博士、我が国からは、画像情報の坂井利之京大教授、自動翻訳の長尾真京大教授、データベースの藤原譲筑波大教授などを含み、これまたはなはだ有益な会合となった。

[出版]

上記の国際集会からも窺われるように、現在は知識がデータベースの形で分類・整理され、それが引き出されて多面的に利用される時代である。ところで、このような知識の分類・整理・利用を可能にするためには、知識を表現する用語が、分野を越え、異なる言語を越えた形で整備されなければならない。我が国は約200年前、西欧の科学を導入した当初から西欧の学術に対応する用語を造り、それによって国語による科学の推進を可能にしてきた。ところがこの場合、その用語は専門分野ごとに別々に制定されたため、たとえば1つの英語表現の用語に分野によって異なる用語が与えられ、その結果、今日のような分野を越えて知識の流通が行われる時代になるとはなはだ不都合を生ずることになったのである。

筆者は、筑波大藤原譲教授と共同で、我が国の25分野についてそれぞれの学会が文部省の後援で制定した学術用語約10万語を1本のファイルに統合し、異なる分野間の用語の異同を一望のもとに眺め得るようにし、今回本研究所刊行、紀伊國屋書店頒布の形式をもって世に送り得ることになった。この作業は、国際情報ドクメンテーション連盟および文部省の多大の援助のもとに行われたものである。我々は、さらにこれらの用語中、数分野で共用する用語を選び、独、仏、西、中国語訳を作る作業を行い、その結果も本学の名で刊行の予定である。これらは、本学が世界の科学技術に対し根本的意義を持つ貢献を成すものと言えよう。

なお、上記のほか前記国際集会の発表文集も刊行される。

本研究所は発足第4年次においても、フォーラム、共同研究、出版の各々につき、さらに活動を進める予定であり、各位の御支援を願う次第である。

知識情報研究所昭和61～63年度事業

1. フォーラム開催

昭和61年度

主題「展望」

「機器分析の進歩」

「電子・情報処理をにう機能性材料」

「臨床医薬品分析」

「ソフトウェア開発の動向と巨大計算への応用」

昭和62年度

主題「新金属・超伝導」

「海洋資源」

「新安全学」

「先端科学技術の動向」

「バイオテクノロジーの基礎と展望」

昭和63年度

主題「機器分析の進歩」

「食品と包装」

「新安全学」

「情報の高次利用」

2. 出版

神奈川大学知識情報研究所発行紀伊國屋書店発売

イ>ScienceofInformationandKnowledge:Overview

ロ)総合学術用語集(ISBN4-906279-00-7C3540)

文部省科学研究費助成

3. 国際集会

イ)第1回新安全学国際シンポジウム昭和62年11月8、9日

ロ)新安全学国際フォーラム昭和62年11月10日

ハ 「知識情報の表現」に関する国際集会昭和62年11月11～13日

二)第2回新安全学国際シンポジウム平成元年1月25、26日

4. 共同研究の推進

イ)「新安全学形成」のための"ゆらぎの変位"に関する調査研究

日産科学振興財団学術研究助成

ロ)日英独仏西表示基本科学技術用語集の作成

鹿島学術振興財団研究助成